

かささぎ 通信 第83号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2019年 7月 12日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇一九年六月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集夜長物語』（一九九六年、刈谷市教育委員会）所収の「羅生門」「けいと」「こうもり傘」を読みました。

「けいと」、「こうもり傘」はともに森三郎童話紙芝居になった作品で、「森三郎の作品を読む会」でも何回か取り上げた馴染みの作品です。

そこで今回は「羅生門」（『赤い鳥』一九三二年十二月号、筆名 村井章一）を中心にまとめてみました。

「羅生門」は、近江から都へ出て羅生門に着いた「かしこ丸・かしい丸」という兄弟が、だまされてそれぞれ別な所に売られ、数奇な運命をたどる話です。笛を吹くのが好きだった兄のかしこ丸は、苦勞して働き、後には管弦の名手源博雅に仕え笛と琵琶を習います。ところが博雅が宮中から預かった玄象という琵琶が何者かに盗み取られ、かしこ丸も主人の身を案じ、ある夜、琵琶の行方を捜しているうちに、羅生門の前までやって来ます。別れたきりの弟を思い、笛を吹いていると笛の音に導かれるように一人の男が楼門から下りてきて、自らのこれまでの罪の数々を懺悔します。その男こそ弟のかしい丸だったと分かります。玄象も博雅の所から盗み出すように言われてかしい丸が楼上に隠していることが分かり、無事に戻ります。

管弦の達人源博雅が鬼に盗み取られた玄象を返してもらった話や、盗人が博雅の筆の音で改心する話は『今昔物語集』（巻二十四）や『古今著聞集』（巻十二）に原典があります（『森三郎の作品を読む会』通信『第2号参照』）。森三郎はそれらの古典を基に、兄弟の話としてこの「羅生門」という童話を作ったことが分かります。別れ別れになった兄弟が再会する話には「めぐりあひ」（一九三四年八月号）があります。三郎の得意とする題材だったと言えます。

「羅生門」という題名から芥川龍之介の同名の作品（一九一四年『帝國文学』）を思い描いた人もいることでしょう。芥川が典拠としているのは『今昔物語集』巻二十九、巻三十一の話ですから、三郎の話とは違うことが分かります。三郎は原典の「羅城門」ではなく芥川の使った「羅生門」を踏襲して、親が亡くなり残された兄弟二人がどのように生きていくかに焦点を当てた作品にしたかったのではないのでしょうか。

『森三郎童話選集 夜長物語』の「羅生門」で弟のかしい丸が兄に「檢非違使の役所につき出して下さい」と頼む場面で「これまでおかした罪から救われます」（55頁）とあるのは原作通り「これからおかす罪から救われます」とあるべきでしょう。弟の懺悔と覚悟が分かる部分です。ところで森三郎は『日本古書通信』の連載『赤い鳥の寄稿家たち』（一九五九年二月）で「芥川龍之介」を取り上げています。「魔術」（『赤い鳥』一九二〇年一月号）の中の「欲に目のくらんだ主人公が賭勝負のトランプの札をにらんでいると、その札のキングの顔が自分に魔術を教えたインド人ミスラ君になるというトリック」に、「年少の私はこの童話を読むたびに、快く酔わされ快く醒まされた」と言っています。後に森三郎は「うんすんガルタ」（『赤い鳥』一九三三年八月号）の中で、トランプの赤い菱形の印の付いた絵札の女の人が主人公に魔術を掛けるトリックを使っています。この話のトリックは芥川の「魔術」を意識しているのではないかと気がします。あるいは芥川が影響を受けたというプーシキンの「スペードの女王」のトランプのトリックにより近いかもしれません。三郎は「うんすんガルタ」で、友達が得意そうに見えるトランプが欲しくて無理にもらったものの、真実を誰にも言えず後悔する十二歳の少年の心を描いています。子供の頃に夢中で読んだ芥川の「魔術」の魅力を、少年の立場で描いているのではないのでしょうか。

八月の「森三郎の作品を読む会」は休会です。

次回「森三郎の作品を読む会」 九月十三日（金）午後一時半～三時半

——保澤やす子さん（森三郎さん長女）を囲んで

森三郎作品の理解を深めるために（2）——